

霊宝館だより

題字・畚野光義師



金剛峯寺鐘樓堂

霊宝館だより 第90号

平成21年2月23日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-5612029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

霊宝館予定

春期企画展

「ほとけの持物と密教法具」

4月25日(土) ～ 7月12日(日)

第30回大宝蔵展

「高野山の名宝」

7月18日(土) ～ 9月27日(日)

秋期企画展

「山岳信仰と高野山」

10月3日(土) ～ 12月13日(日)

イベント

フォトコンテスト開催予定

(詳細につきましては
改めて公表させていただきます)

現在平常展開催中

4月12日(日)まで

高野山の名鐘

其の12 金剛峯寺鐘楼堂の鐘

金剛峯寺の正面の門をくぐると右

手に鐘楼堂があります。外からは釣鐘が見えにくいため鐘楼堂であることには気付きにくいのですが、袴腰付入母屋造りの立派な鐘楼堂です。現在のこの鐘楼堂は元治元年（一八六四）に建立されたものですが、豊臣秀吉が青巖寺を建立した当初よりこの場所には鐘楼堂が建っていました。幾度の火災により、鐘楼堂とともに釣鐘も失われてしまい、

掛け換えられています。

先人の研究により、戦前には次のような釣鐘が懸けられていたことが分かっています。大きさは通高五尺二寸五分、口径三尺一寸四分、厚さ三寸二分、撞座の直径六寸。銘は
高野山 金剛峯寺 青巖寺 冶工大
阪高津住 岡本久兵衛 藤原清久
文化二年乙丑歳 九月吉祥日
以上のことから、戦前の鐘はもともと金剛峯寺（青巖寺）の鐘楼堂に掛

連載



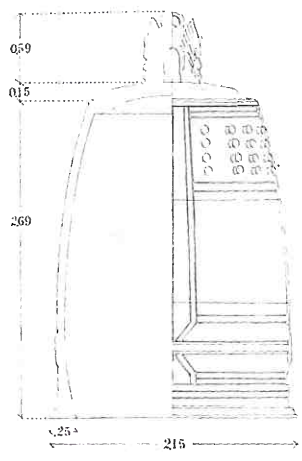
ける鐘として、大阪の鍛冶師によって文化二年（一八〇五）に造られたものであることが分かります。しかし、この鐘は戦時中の金属供出により姿を消してしまいました。

現在、掛かっている鐘の大きさは通高三尺四寸三分、口径二尺一寸五分、厚さ二寸五分、撞座の直径は五寸四分であるから、戦前のものに比べて小ぶりです。しかしながら、銘をみると

奉鑄立 紀伊国那賀郡池田庄 浦上
御宝前之鐘 公方 私等建立
右為天下安全人民快樂 万福充滿五
穀成就也 康正二年丙子霜月 日
大工藤原末次

とあり、康正二年は一四五六年から、戦前のものよりおよそ三百年古い鐘です。そして紀伊国那賀郡池田庄浦上御宝前とは現在の和歌山県紀の川市にある海神社のことで、この鐘は海神社へ奉納するため鑄造されたことが記されています。海神社は延喜式神名帳にも記載されている古く名の知られた神社です。しかしながら天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の紀州遠征の折に兵火にかかり本殿をはじめ宝物も焼失してしまいました。そのような歴史のなかでこの鐘がいつ高野山へ移されたのかは不明ですが、豊臣秀吉によって焼かれた神社の釣鐘が、豊臣秀吉が建立した青巖寺である現在の金剛峯寺の鐘楼堂に掛かっていることは不思議な縁を感じます。

現在、この鐘は旧暦六月十日に行われる御最勝講など重要な行事の際に撞かれています。（K）



収蔵品の紹介 64

重要文化財

五部心観

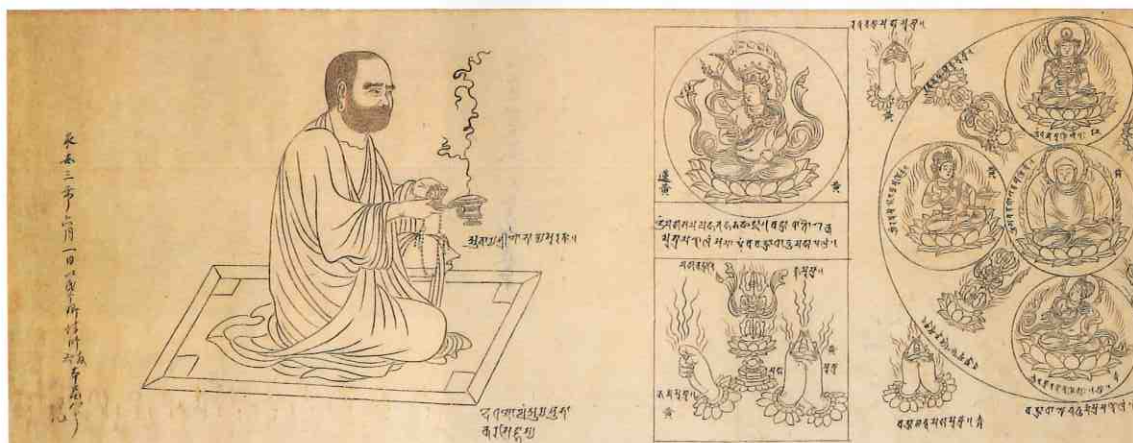
紙本墨画 西南院

縦31.5cm 全長1360.0cm

平安後期 承安3年(1173)



巻首



巻末

五部心観は弘法大師空海の姪の子で、天台宗寺門派の祖、智証大師円珍(八一四〜八九二)が唐の青竜寺法全より授けられた白描図像です。

「金剛頂経」金剛界品に説かれる六種類の曼荼羅における五部(仏部・金剛部・宝部・蓮華部・羯磨部)の諸尊を観想する方法を伝授するため

に作られたもので、そのため「五部心観」の名があります。画面は三段構成で上段に諸尊の姿、中段に梵字で尊名と真言、下段に各尊のシンボルである三昧耶形と印契(手指の構えや持物)があらわされます。巻末に描かれる柄香炉を持つ僧は真言八祖(伝持の八祖)の第五祖である善无畏三蔵(六三七〜七三五)です。円珍請来本は園城寺(三井寺)が秘蔵し、国宝となっています。

西南院本は昭和十四年(一九三九)に発見された写本で、霊宝館には昭和五十七年(一九八二)に収蔵されました。奥書によると承安三年(一一七三)に民部卿律師教智の所持本をもとに転写されたものとわかります。

元来台密の秘伝の図像巻が園城寺外に流出し、東密で転写されたと考えられることから、平安末期における図像研究や図像集編さんが盛んな風潮をうかがうことができる貴重な資料です。また、その特徴的な構成や梵字が多用される画面、和様化が進むものの唐、さらにはその源流のインド的表現が感じられる尊像、さまざまな三昧耶形など、見ているうちに引き込まれる魅力があります。

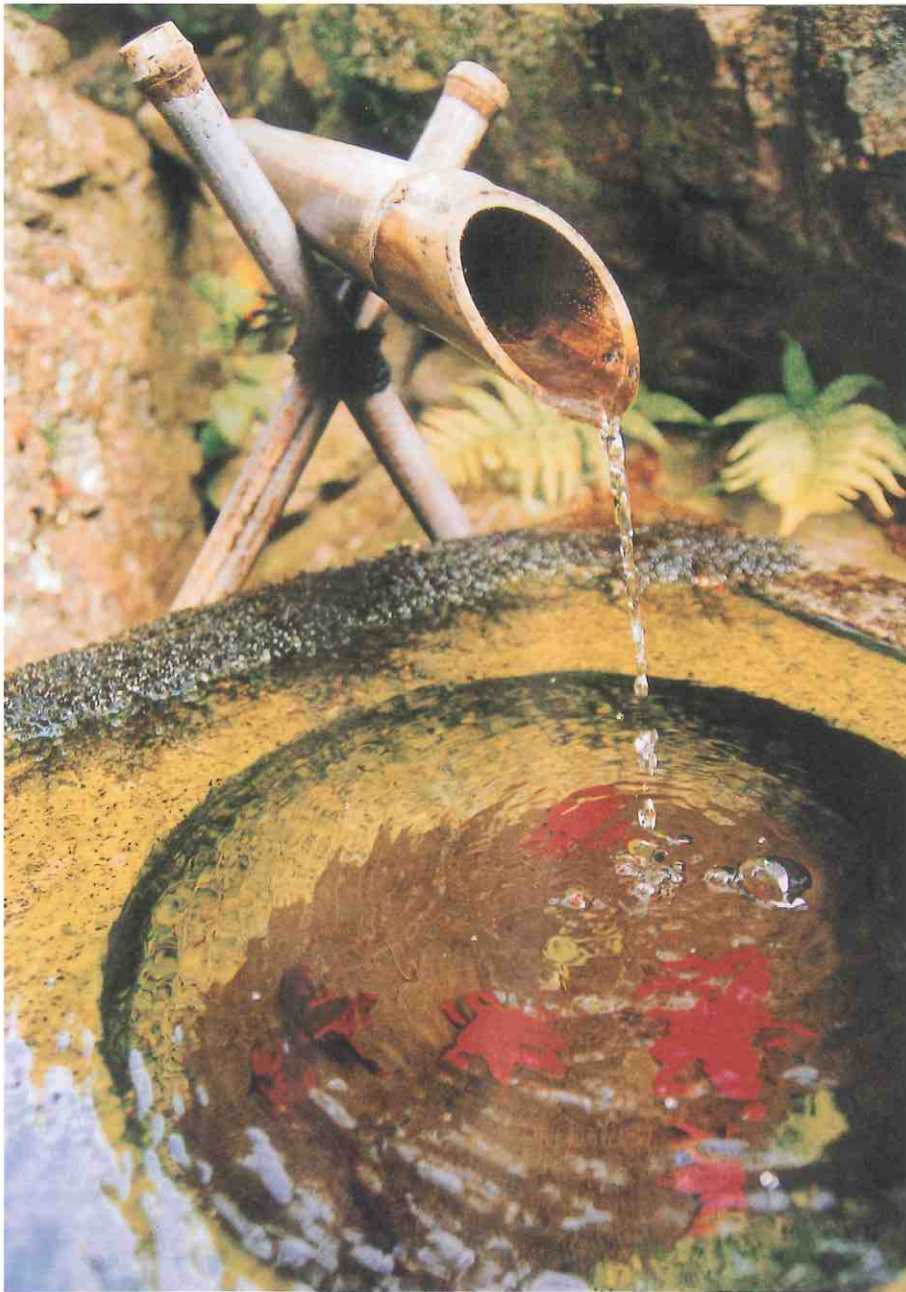
(F)
〈平常展にて展示中〉

「高野山の秋」フォトコンテスト

入選作品発表

(受賞者敬称略)

グランプリ賞



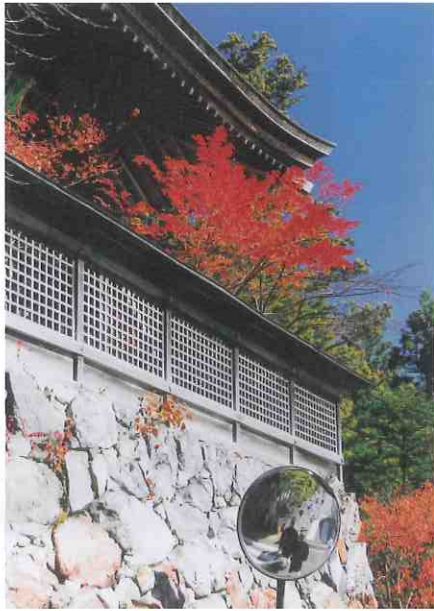
近藤 説秀

今回で二回目となるコンテストも少しずつ知名度も上がり、百点に近づく応募作品を集めるようになりました。

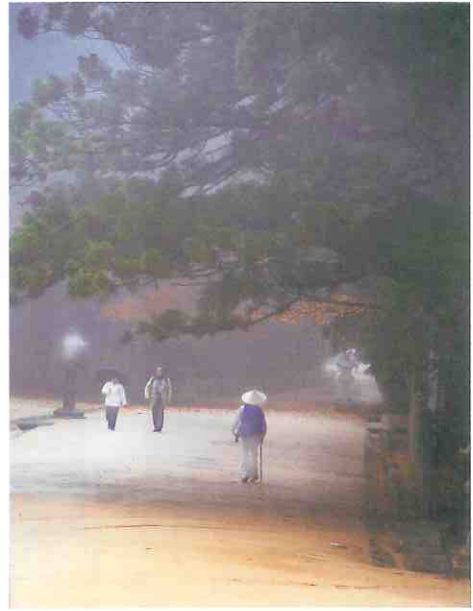
今回のテーマは前回と同じ「高野山の秋」。審査に当たっては、前回とは異なり霊宝館渡り廊下に展示をし、不特定多数の拝観者すべてが審査員となって投票いただく審査形式で行いました。グランプリ賞一点、金賞四点、銀賞五点、入賞十点、計二十点が選ばれ、惜しくも選外となった作品もたくさんありました。

次回におきましても、フォトコンテストの開催を計画しております。(テーマを変更など検討中です。)応募期間等の詳細につきましては、改めて公表させていただきますので、皆様におかれましては引き続き、高野山での写真撮影を楽しんでいただくとともに、作品のご応募をよろしくお願い申し上げます。

金賞



田伏 猛



杉本 博

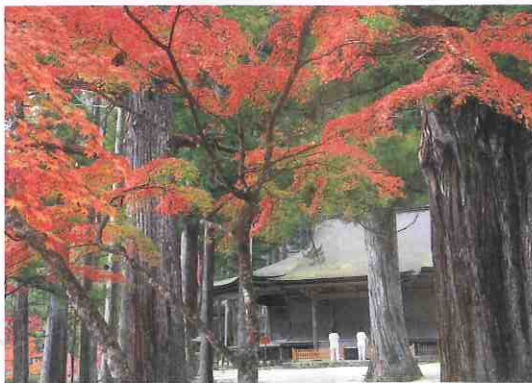


近藤 妙子



成田 晴美

銀賞

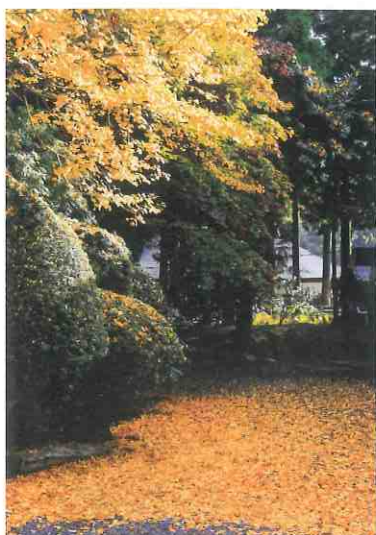


塩尻 博



杉本 栄子

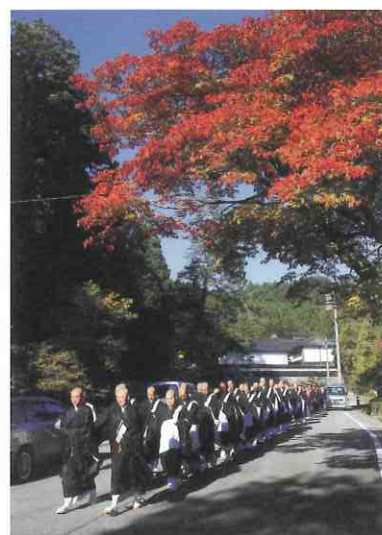
銀賞



楠本 武男

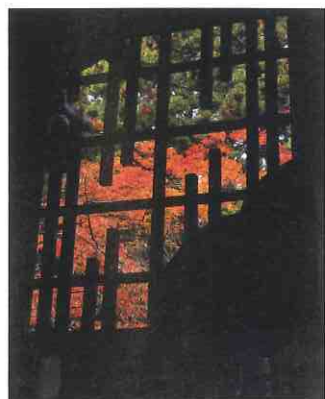


増谷 妙子

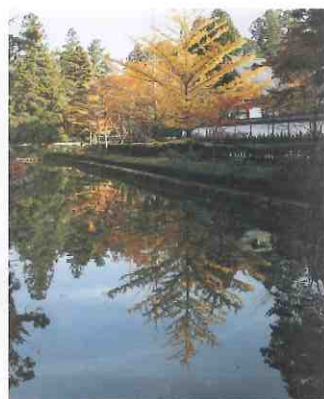


山口 隆章

入賞



佐藤 正実



松本 一郎



丹下 三郎



富澤 京子



保井 一彦



日下 義真



山中 健次



小谷 育雄



石垣 泰伸



辻井 恒

トガサワラ・柾楳

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

トガサワラは三重県・奈良県・和歌山県の紀伊熊野山地と高知県の限られた深山に自生するマツ科の常緑樹です。

いいですが、現在では山林内に自生するものは、あるのだろうかという状態です。

ただ、幸いなことに、霊宝館からは、ほぼ真南にあたる高野町の相の浦（古くは花園荘・十三ヶ村の一つ久木村と大滝村の中間の村）の丹生高野明神社の境内には幹周四メートル五十七センチ、樹高が約三十メートルの巨樹が、現在も樹勢すこぶよく葉枝が繁茂しています。

もともと繁殖力の強くない樹種で特に若木は環境の変化に敏感で気難かしく人工林の増加とともに減少し、絶滅危惧種に指定されている樹木の一つです。

この巨樹は大正八年から昭和九年の間、旧制高野山中学（高野山高等学校の前身）の博物担当教諭として

在任中、高野山において、ヌマジリグミ、コウヤシロカネソウ、ヌマジリゴケなどの発見をはじめ、高野山の植物の研究に没頭し、現東京農工大（国立）に転任された沼尻好先生が大正十一年頃に見つけられ、貴重樹種であるので保護すべしとの進言により、和歌山県から天然記念物に指定（現在は解除）されたといえます。

この葉枝を分けていただき挿し木を試みたのですが失敗しました。若木の葉枝に比べ老木のそれは発根させるのが難しいとのこと。当地で主にコウヤマキの育苗をされている方に、挿し木もしくは実生による育苗を、お願いしているところでは。

平成十八年十一月に花王香料開発研究所と和歌山県環境衛生研究センターが共同で行った高野山のコウヤマキと熊野山地のトガサワラについて大気中に発する香気の実験結果が発表されました。このトガサワラからはライムの柑橘・赤ジソ系の爽快感と薬効感の香りが検出されたそうです。

トガサワラという和名は、葉がトガ（高野六木の一つ、マツ科のツガの別名）に、材が木曾五木の一つ、ヒノキ科のサワラのそれに似ていることによる命名といえます。

高野六木とともに大切に保護して絶滅することのないような心配が必要で。

なお、高野六木についての記述の順序についての問い合わせには、植物の自然分類にしたがえば、アカマツ、モミ、ツガ（トガ）、スギ、コウヤマキ、ヒノキとするのがよいのではと、答えています。



トガサワラの葉枝



枝を張って繁茂する巨樹



トガサワラの幹

高野山の文化

高野山の明神信仰

前奥之院維那 日野西 眞定

(一) 高野山の丹生・高野両明神の発生

(1) 結界の発生

① 『性霊集』に記された結界

高野山に建立された金剛峯寺のはじまりについては、結界の問題から考えていかなければならない。

弘法大師空海は、弘仁七年(八一六)六月、嵯峨天皇に高野山を修禪の地として、賜うことを願ひ出ている(『続性霊集補闕鈔』巻九にある。同書には『遍照發揮性霊集』もあり、以下全て『性霊集』と略称する)。これは同年七月に官符が発行されている(『高野山官符』)。そこで、翌八年に結界の法を行っている。はじめに全体の結界を行い、続いて中核の地となる「壇場(上)」に対して、二回目を行っている(『性霊集』巻九)。「壇場」には、密教の堂塔伽藍を建立するためであった。但し、『性霊集』に記述されている

「結界文」は、「所有東西四維上下七里の中の一切の悪鬼神等は、皆我が結界を出で去れ」とあり、『陀羅尼集経』(巻第四)〈大正新脩大藏経巻第十八、密教部一〉掲載の「結界」の文と同一である。弘法大師は、公式的には密教の行法によって、「結界」を行ったことにしている。

② 『高野山秘記』に記された「結界の十六峯」

但し、日本の山岳霊場の結界は、タブーを伴う日本独特のものであり、この密教の行法によるものだけではない要素を持っている。五来重先生は、「仏教民俗」を説くが、この問題も、この立場から考えなければ、本当の姿は認められない。つまり、日本の仏教は、インドで説かれた仏教に、日本人

の民俗信仰を加えた日本人独特の仏教を形成しているのである。

高野山の結界について、詳しい実態を記しているのは、『高野山秘記』の「結界の十六峯」である。これを次に記する。

東方不動峯(摩尼峯)、普賢・伊頭久志美・与呂古比。
南方宝珠峯 多加羅・比加利・波多保古・恵美。
西方阿弥陀峯 観音・文殊・転法輪・多加羅比。
北方覆鉢之峯 志和佐・万保利・薬奴・古牟志。

以上である。

さらに、西方阿弥陀峯には、「此ノ峯ニ依テ、人多ク往生ヲ得」とあり、多加羅峯に対しても、「若シ求聞持法ヲ修スルトキハ結願ヲ修法ス」とある。阿弥陀峯は、「高野山往生伝」を見ると、沙門蓮待は承徳二年(一〇九八)に往生するが、その時大門より外側に

なるかも知れないこの山中に往き、西方の極楽浄土を拝しつつ往生を遂げている。結界内を死の汚れによって乱すことを避けたのである。まだこの頃には、結界内に対する清浄観が強かったのである。

また、多加羅の峯で求聞持法の結願を、この峯で当時には行っていた。何故こうした伝統があったかも問題になる。前と同じように、院外の行動が多いことも指摘出来るが、このことについては、私は『性霊集』の高野山を賜う文中に、「空海少年の日、好むで山水を渉覽せしに」とあり、高野山にそれまでに、一度来られたことを記されているのが気になる。若い時代の弘法大師空海は、求聞持の法を修しながら、山々を巡っていたのは、周知のことである。高野山に来られた時、その清浄な霊域が気に入り、ここで同法を行われたと思われる。それが、この場ではなかったかと推定しても、必ずしも否



高野山絵図
結界線が周囲を囲んでいる。

定出来ないことのように思われる。
 このような実践的な面は、行場の記述のなかにも知ることが出来る。東方の端の不動峯、別名「摩尼峯」は、奥の院御廟後方の摩尼の峯・楊柳の峯・転軸の峰とある三峯の一つである。西方阿弥陀峯も西の端に場を占めている。これら四至の峯を中心として各々四つの行場が有る。それらの中には、普賢、観音、文殊の各菩薩の名が認められるが、その他によるこび・いつくしみ・

かたらいなどの人間の行動を示す名が認められる。生きた行の場であったと考えられる。少なくとも、『高野秘記』が編纂された鎌倉時代には、この状態になっていたのは明かである。
③金剛峯寺の年中行事
 ただし、この『高野山秘記』の成立については、阿部泰郎の『中世高野山縁起集』では、嘉禎四年(一二三三)に、正智院住職道範(一一七八〜一二

五二)がまとめた。または元暦元年(一一八四)にまとめたとの二説があるという。いずれにしても、平安時代末から鎌倉時代に入り、これまで、師匠から弟子に折紙によって、密かに師資相承されて来た秘事が冊子になり、世間に公表されるようになって来たことには、明らかに人の意識の変化があったことを認めなければならない。これには、中心的に道範の存在が大きかったと考えられる。

なお、結果が前記したように、行の場となったのは、平安後期の、折親上人定誉(九五八〜一〇四七)と明算(一一二〜一一〇六)の時代になり、教団の教学的面も整備されていったと考えられる。金剛峯寺年中行事も、まとまったものとしては、『高野雑日記』の延久四年(一〇七二)六月十七日に申し合せられた記録がもっとも古い。正月修正会三箇日、二月彼岸七箇日・涅槃会、三月御影供、四月仏生会・(夏)安居初、五月花供、六月准胝悔過・蓮花会・不空御忌、七月(夏)安居終・盆供、八月彼岸七箇日、九月万灯会、十二月恵果御忌、が行われている。その他に、毎月「白月(十五日)黒月(一日)」に布薩を行っている。これは、僧達が自己反省し、罪を告白懺悔する集いである。そこに厳しい修行態度が汲み取られる。

金剛峯寺の僧が、年中行事を完成するのは、正応四年(一二九二)の『金剛峯寺年中行事帳』で、膨大な量のものである。これが金剛峯寺年中行事の基礎となり、今日に及んでいる。このように年中行事も鎌倉時代に完成されている。その時々の中行事は、僧達の申合せによって決められている。基本は、日本人の民俗信仰で、それに、仏教(密教)的要素を加え日本独自の仏教民俗を生み出している。 つづく

高野山の高野豆腐

高タンパクで低カロリーといわれる「こうや豆腐」。この「こうや豆腐」の「こうや」という名称の由来が、高野山の「高野」であることをご存知でしょうか。

高野豆腐は高野山の食文化の一つとして確立したもので、本来は「氷(凍)豆腐」と呼ばれていたものが、高野山の土産物として知名度が高くなるにつれて、「高野豆腐」と呼ばれるようになったものと考えられます。『凍豆腐の歴史』(宮下章著)という本によれば、西日本一帯では「高野豆腐」と呼

び、東日本では「しみ豆腐」、東北地方では「こおり豆腐」とする場合が多いと分析しています。

高野豆腐の伝説

高野山における高野豆腐の起源については不明な点も多く、よくはわかっていないのですが、代表的な説を挙げると次のようなものがあります。

- ①弘法大師空海が中国から伝えた説
 - ②厳冬の高野山で偶然にできた説
- 両者の内、通常は②の説がよく知られています。簡単にご紹介しますと、

むかし、高野山の小僧さんがある寒い日に豆腐を買ってきました。ところがその小僧さん、つい豆腐を屋内に入れて忘れたとかで、そのままに放置したままだったのだそうです。次の日の朝になると豆腐はカチンコチンに凍ってしまったのでした。さてどうしたものかと、天日にさらして乾燥させたところ、偶然にも「氷豆腐」が出来上がったというものです。

高野豆腐についての史料

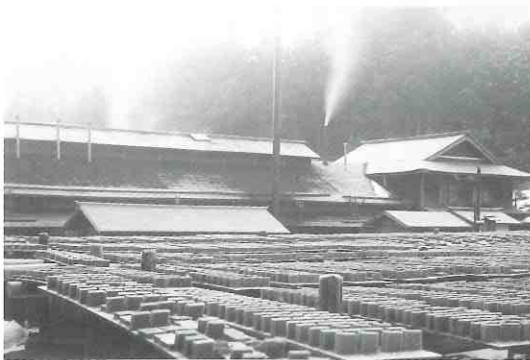
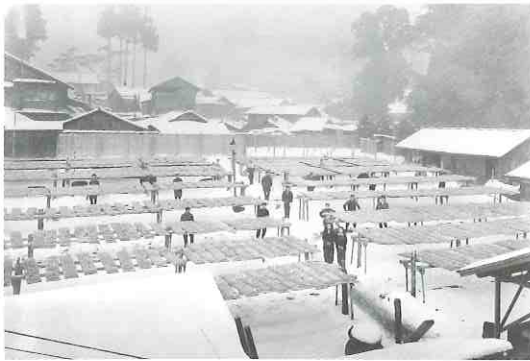
先に紹介した伝説がいつ頃の話なのかは不明で、単に後世の人の作り話なのかも知れません。しかし、遅くとも江戸時代の前半期には、高野豆腐が

高野山で製造され名物となっていたことが次の史料からも分かります。

慶安三年(一六五〇)に刊行された『貞徳文集』というものがあります。これは手本となる手紙類を模範文として集めた書物なのですが、その中に高野豆腐が高野山からの贈答品として利用されている内容の一文が載せられています。また文化八年(一八一二)の『紀伊国名所図会』には、冬になると寺々の児童が集められ、氷豆腐製造を手伝ったことが「氷豆腐製造の図」(図参照)とともに記されています。さらに天保九年(一八三八)の『紀伊続風土記』では、高野山における高野豆腐の始まりは中世期以来であると、山上には数十軒の氷豆腐屋があると記しています。

高野豆腐の製造

江戸時代中期以前の高野山において、味噌・醤油・豆腐や氷豆腐などの加工食品は、自給自足的にお坊さんたちが製造することもあったと考えることができます。ところが元禄五年(一六九二)には、こうした雑務などもも担当したお坊さんの階層(行人)が、幕府の裁断によって一気に減らされるといった事件がおこりました。これ以



高野山での高野豆腐製造

昭和25年(1950)、一の橋(玉川通り)地区の一画にはカネマス豆腐店の工場があり、厳寒時には豆腐を凍らせるための作業風景が見られました。明治時代の山内には稲岡工場(カネマス)の他に、野徳、角芳、奥の坊などの工場があったといえます。この時代、高野山で高野豆腐造りを行った人たちは、酒造りの杜氏で有名な丹波但馬からの出稼者が大半でした。毎年冬が訪れると、行李を背負った但馬人が高野山へと登ってくるのが風物詩となっていたようです。



高野山での水豆腐製造の図（『紀伊国名所図会』複写）

水豆腐を造るには深夜から未明にかけての作業となります。本図からは、月明かりの下で豆腐をさらし、作業場には種油の燈明が点いているのがわかります。壁裏の軒下には大量の大豆かと思われる俵が積み上げられ、短期間に大量生産していた様子を知ることができます。こうした作業を手伝ったのは、高野山の各寺院に住み込んでいた児童たちでした。出来上がった高野豆腐を運んだり、手際よく詰め込む姿などがいきいきと描かれています。ちなみに当時の高野山は女人禁制でしたので、描かれている人物はすべて男性ということになります。なお、本図は『紀伊国名所図会』所収の図を複写して色を付けたもので、実際とは異なります。

降、高野山近隣の人々や職人たちが仕事を求めて山内に居住しはじめ、加工食品などの製造販売を生業としたのではないかと想像することができません。

それは、店舗を出す場合、行人方寺院の長屋に限られていた時期があったことからもうかがえます。

こうした状況の下、高野豆腐に関していえば、一説に宝永五年（二七〇八）

に殿エ門という人が、行人方寺院の長屋を借りて製造したのが商品化の始まりだとされています。

商品化される高野豆腐

殿エ門は山麓河根村（伊都郡九度山町）の人で、少年期より高野山五大院に入り、後に同院の納所まで勤めた人であったといえます。殿エ門には商才

がそなわっていたようで、浦の段と呼ばれた現在の一の橋（玉川通り）付近に建っていた雲聖院の長屋を工場とし、門脇屋と称して高野豆腐の製造を始めたのだそうです。以後、殿エ門に続いて河根村の人たちが農閑期における副業として、山上で釜を開いていくことになったといえます。

以上の話は門脇屋殿エ門を先祖とし、戦後まで高野山上で高野豆腐を製造していたカネマス豆腐店に代々伝わるものです。この話が事実だとすると、『紀伊国名所図会』所収の「水豆腐製造の図」は、商品化して製造していた状況を示していることになり、とても興味深いものとなります。

高野豆腐製造の広がり

高野豆腐が山内の寺院によって自給自足的に造られていたものから、一転して商品化され近代に至ると、その需要はさらに高まりをみせました。製造地域は、高野山から富貴（高野町）、野迫川（奈良県）に及び、さらに葛城峰、河内長野、千早赤阪から最終的には近畿全域へと広がりを見せました。中でも野迫川は江戸時代の後期頃から大規模に高野豆腐の製造を開始し、現在の橋本市から玉川峡沿いに点在する集落（宿・杖ヶ藪）を通り、原料となる大豆を運ぶための「豆街道」と呼ば

れた道が整備されるほどとなりました。

高野豆腐の製造には、氷点下五度以下の自然の寒気にさらして凍らせるという重要な行程があります。時には気温が下がららず、不完全な製品となることも少なくありません。この点、商売としては随分と度胸の要るものであったといい、天候の読み違いから失敗が重なり、工場をたたむ場合もあったようです。

その後、時代の進歩とともに人工冷凍法が開発され、従来に比べると格段に安定した製造方法に代わりました。と同時に時代はすでに大企業による大量生産期に入っており、地方の小さな工場はこれに太刀打ちできなくなっています。山内でも最盛期には十数軒あったとされる高野豆腐製造業者も、戦後しばらくして姿を消してしまいました。

冒頭でも触れましたが、高野山で高野豆腐が造られていたことを示すものは、今では「こうや豆腐」の名前だけとなりました。本来の天然高野豆腐の味は、実に素朴で香ばしく、舌触りのよいものだったということです。

(M)

前頁の写真は門脇屋殿エ門さんの子孫である稲岡脩一郎氏より提供を受け、種々ご教示をも賜りました。記して感謝申し上げます。

時 事



書体は、弘法大師空海が24歳の折りに記した
靈誓指帰ろうしじききから抜粋したものである

【扁額完成】
昨年十二月、霊宝館正面玄関に扁額が完成した。縦六十センチ、横一米ートル五十センチ、厚さ九センチほどのケヤキが使われ、職人により約五ヵ月という月日をかけ漆を練り返し塗られ木目が鮮明に出ている。イメージ通り迫力のある扁額となった。



修復後の様子



修復前の様子

【松平秀康及び同母霊屋の修復完了】
昨年十一月、松平秀康及び同母霊屋の修復が完了した。倒壊していた石柱を復旧し、老朽化により腐蝕した貫などを取り替えた。
昭和四十年五月二十九日に重要文化財に指定されており向かって右が松平家初代の秀康を祀る霊屋で、左は秀康自身が母を祀るために建立したものである。



御供所横 放水銃



茶処前 地下式放水銃
水圧をかける事により自動で地上に上がってくる

【奥の院消火設備工事完了】
昨年十一月、奥の院消火設備工事が完了した。消火管を石綿管からPE管に取り替え、また、消火栓の取り替えが行われた。茶処前の消火栓は景観の考慮や参拝者通路確保のため、地下式の放水銃が取り付けられた。新設された消火栓を使い奥の院職員により訓練が行われ、職員の消火設備に対する知識が向上した。

紫雲放光

立春を迎えて、暦の上では春になり日の射す時間がずいぶん長くなりまりました。しかし寒さはまだまだやわらぎません。皆様は風邪などひかれてないでしょうか。
紫雲放光を書いている今日は2月14日、バレンタインデー。私には自然からの贈り物が届き始めました。それは「花粉」です。だいたいこの時期からテレビでも頻繁に言われていますが、その番組を見るだけでむずむずしてきそうです。天気予報の花粉飛散情報に桜前線が打ち勝つ日が待ち遠しい…。

(S)

利用案内

開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり